

「あれ、お隣さん？」

最近のお隣さん事情って、軽薄で顔も知らないものかと思った。まさか一度見たら忘れられないような人なんて。

マンションの廊下に立っていたのは、スーツ姿の男の人。鍵を開けていたのか、ドアノブに手をかけている。清潔感のある黒髪、涼し気な目元。社会人かな、顔が綺麗で……180センチはありそうな長身でちょっと怖い。頭を軽く下げ、なんとか最低限の挨拶をした。

「……今日、引っ越してきました」

「僕は南です。昼間は働いてるんで騒いで貰って大丈夫ですよ」

「いや、そんな騒がしくする予定はないので」

「学生さんへの偏見だったか。ごめんね」

あはは、と低いけど柔らかい声で笑うと、南さんは隣の部屋に入っていた。

自分の部屋の鍵を閉め、階段を降りる。春の風を頬に感じながら、まとめたダンボールをゴミステーションへ捨てた。ふう、とひとつ息をついて夜空を見上げる。

びっくりしたーーーーー！！こんなことならちゃんとした服着とけばよかった！

実家から2時間かけて通学するのが苦痛になり、バイト代を貯めてやっと引っ越した大学2年の春。これからはゆっくり寝て、好きな時間までゲームして、一人を楽しむ予定だったのに。

「はあ……。夜ご飯どうしょ」

驚きと緊張がやっと一段落し、お腹がすいてきた。階段を上がれば、隣の部屋からふわりといい匂い。お味噌汁と、揚げ物かな。南さんって料理できるんだ。鍵を差し込めばお隣からもガチャリと開錠の音がする。

「あれ、また会ったね」

「そ、うですね」

「醤油が切れちゃって……唐揚げに醤油は必須で」

「私もご飯買いに行くところで」

さっきよりもラフなスウェットを着た南さん。イケメンは何を着てもかっこいい、ずるい。そんな南さんは少し考える素振りをして、良ければ、と笑った。

「お、お邪魔します……」

「はいどうぞ」

私の部屋を線対称にひっくり返したような間取り。少し変な感じがしつつ、そろそろと足を進める。私の手には醤油のボトル。おつかいの代わりに夜ご飯をご馳走する、という言葉にまんまと釣られたのである。

「ありがとう、助かったよ。適当に座っててね」

何も考えず、言われた通りにしちゃったけど早まったか。だっていい人そうだし、ご飯は何も考えてなかったし。私に都合の悪いことなんてない、今のところ。ローテーブルの隅っこに座っていると、唐揚げが揚がる音が聞こえてくる。

「お隣さんはビール飲める？」

「あ、はい」

はい、と手渡された缶ビールは冷たくて、2本をテーブルに並べた。ダメだ、着々とご飯の準備が進められていく。

「おまたせ〜」

「うわ……美味しそう」

「あはは、良かった」

目の前には湯気をたてた山盛りの唐揚げ。そこにサラダとみそ汁、輝く白米。最高の食卓に、さっきまでの不安や南さんへの興味が吹き飛んで釘付けになってしまう。南さんが向かい側に座ったのを見て、すぐに手を合わせた。

「いただきます」

出来立ての唐揚げを一口齧れば、濃いめの下味にニンニクの香りが広がって……気づけば次々と手が伸びていた。

「美味しい？」

「あ……はい、美味しいです」

「よかった。引っ越して疲れるよね、お疲れ様」

急な労いが少しだけ恥ずかしくてビールを煽る。唐揚げとの相性が最高で、すぐに飲み干してしまった。

「まだビールあるけど、もう一本飲む？」

「あ、いえ大丈夫です。えっと……小林凜、です」

「小林さんかあ。僕は南悠生です、これからよろしくね」

人懐っこそうな笑顔を正面から浴びて、眩しい。ていうか、そんな見た目僕、なんだ。

アルコールか、唐揚げの熱さか知らないけど、火照る顔を隠すように水を煽った。

これが約二ヶ月前の話。

「凜ちゃん、起きてるー？」

寝ぼけたまま出たインターホンのカメラには、2か月前よりも人好きのような笑顔。無意識に握っていたスマホで時間を確認する。14時。昨日はオンラインゲームが白熱して、寝たのは明るくなってからだった。午前の授業、飛ばしたな、と他人事のように思いながらボタンを押す。

「鍵、開いてますよ」

「入るね」

かちやり、とドアが開く音。悠生さんは平日休みで、たまに私の部屋を訪ねてくる。完全に胃袋を掴まれてしまった私は、そのままずるずると生活のお世話までされるようになっていた。その証拠に、悠生さんは何作ろうかな、と躊躇なくうちの冷蔵庫を開けていく。

出会いがボロボロの姿だったため、もう寝起きを見られても何も恥ずかしくなかった。

「何食べたい？」

「うーん、オムライス」

「おっけー。じゃあ出来るまでに……それ、片づけよっか」

「ん？」

ぱっと振り返ると部屋干ししていた洗濯物。もちろん、その中には下着も雑に干しているもので……。

「あ！？す、すみません！！」

「急に來ちゃった僕が悪いんだけどね、ちょっと気を付けてもらえると」

「お、お目汚しを……」

急いで洗濯物をまとめて目につかないようクローゼットに押し込んだ。
さすがに気まずい。

冷凍のチキンライスを温め始めた電子レンジの音が部屋に響く。手持ち
無沙汰でスマホをいじると卵を割って、かき混ぜる音。

「今日バイトは？」

「ないのでフリーです」

「授業は？」

「……フリーです」

「あは、また飛ばしたんだ。ダメだよ、ちゃんと行かないと」

フライパンで卵が焼ける音。その途中で電子レンジが温め終わったことを
告げる。キッチンに向かい、お皿を出してチキンライスを盛りつけてい
れば、広くないそこで肩が軽くぶつかった。

「おっと、ごめんね」

「いえ……お仕事休みなのに、毎週来てもらっちゃってすみません」

「休日って生活リズムが崩れちゃって。凜ちゃんと一緒に食べないとご飯
忘れちゃうんだよね」

そういうところ、ちゃんとしてそうなのに。意外と私と同じようなところ
があって嬉しい。悠生さんも人間なんだ、と呟くと笑われた。

私が最近、調子に乗ってご飯のリクエストなんか連絡するようになった
から気を使ってくれてるんじゃないのかも。

「……前のお隣さんにも、作ってあげたんですか？」

「ん？」

「唐揚げ」

悠生さんは、卵から目を離さなかった。

「作ってないよ。たまに挨拶するくらいだったかなあ」

「そ、うですか。みんなに餌付けしてるのかと思いました」

「そんなことしないよ」

ふわふわの輝く卵がチキンライスに乗つけられた。これが餌付けじゃなければ、なんなんだろう。それを聞いたら、もうこの関係は終わってしまいそうで。

フライパンを置いた悠生さんの、黙っていたら少し怖い瞳がかち合った。

「凜ちゃんだけだよ」

耳心地のいい、低い声が上から降ってくる。優しく目が細められ、悠生さんは少し意地悪に笑った。狭いキッチンはその目線から逃げられる場所が無い。顔を覗き込まれても、整った顔を見つめ返すしかできなかった。

「だって僕が作らないと、ちゃんにご飯食べないでしょ？」

「それは……何も言えません」

「ほら、お皿持って行って。お水いれてくから」

手渡されたお皿をテーブルに持って行く。ぽん、と優しく押された背中がじんわり熱くて、少し窓を開けた。私は美味しいご飯も食べれるし、イケメンと話ができるし……でも、悠生さんはどうなんだろう。

あれがお節介なのか、子供扱いなのか。大人ってこんなにズルいのか、と入ってくる風で頬を冷ました。

あれからもう一度寝て起きて、ゲームをして課題をしてゲームをしていれば日付はとっくに超えていた。隣の部屋の電気はまだついていないようで、悠生さんはまだ外出から帰ってきていないらしい。

ぐっと凝り固まった身体を伸ばして、キッチンに向かった。適当に買い置きしていたカップ麺にお湯を注いで3分。今まで深夜のカップ麺が一番好きだったのに。

「……なんか、あんま美味しくない」

そういえば、最近悠生さんのご飯を食べる機会が多くて、カップ麺を食べる頻度が落ちていた。それに、一人で食事をするのも減ってるし。やっぱり悠生さんのご飯と一緒に食べる方が……。

それだけじゃ、ないかもしれない。
深夜はいらなことまで考えさせられる。軽く頭を振って最後の一口を食べ終えた。

後片付けをしながら、ふと思い出す。遅くまで飲んで帰ってきた悠生さんは、翌朝8割くらいの確率で不機嫌になる。明日はどっちかな、とゲームを再開しようとしたとき、思いついた。

みそ汁でも作っというてあげようかな、二日酔いに効くって聞くし。

そうと決まれば、PCの電源を切って部屋を出る。近所のスーパーで食材を買って、悠生さんの部屋の鍵を開けた。以前、またおつかいを頼まれたときに渡された合鍵。返しそびれていたのを使わせていただく。

電気をつけてキッチンに立つ。なぜ悠生さんの部屋に来たかという、私の部屋に鍋がないからだ。スマホでレシピを調べながら調理を進めれ

ば、それっぽい匂いがしてきた。いい感じじゃん、と火を止めて片付けをしていると、玄関の方が少し騒がしくなった。

扉の向こうで誰かが声を上げている。やれ鍵はどこだ、起きろだ。しまいにはドアノブをガチャガチャ……。ドアスコープを覗けば、見慣れた背中と、肩を貸している女の人映った。

近所迷惑でクレームが入ったら大変だ。中から鍵を開けると、目を閉じた悠生さん。顔が真っ赤で、足元もおぼつかない。

「えっ、女の子!？」

「お届けありがとうございます」

「もしかして……あなたが凜ちゃん？」

気が強そうだけど、愛嬌のある美人なお姉さん。酔っているのかそこそこ大きい声だけど、悠生さんは目を覚まさない。はぁ、と頷けば快活に笑った。

「こいつさー、途中からずっと凜ちゃんの話してたのよ」

「……え」

「凜ちゃんは可愛いだ、凜ちゃんはいいい子だって、ずーっと。拳句、電話したら出なくてやけ酒してこの有様」

なにそれ。どういう話の流れでそんなことに？電話は……スマホ見てなかったけど、かかってきたことなんて一回もなかったのに。

眉を下げて困っていれば、お姉さんはガクスクスと笑って、悠生さんをこちらに引き渡してきた。想定外の重さにふらつく。これじゃあどっちが支えられているのか分からない。

「気を付けてね、こいつ結構重いから」

「悠生さん、大きいですもんね……」

ふふ、と楽し気に笑ったお姉さんはヒールを鳴らして去っていった。

悠生さんを引き摺るように廊下を歩く。こんなに密着したことなんてない。呼吸が耳元で聞こえて鼓動が早くなっていく。

けど、それよりもまずこの状況を何とかしないと。非力な私じゃどうしようもできない。起きてもらう方が早いかな。

「ほら、悠生さん。ベッドまで歩いてください」

「……凜ちゃん？」

「そうです。重いんで起きてもらっていいですか」

「ほんとに、凜ちゃん？」

不思議そうに聞いてくる声が、いつもより低くてかすれていた。酔っているのに、妙に真剣な目。その奥に熱がチラついているように見えて、私は視線を逸らして廊下を進んだ。

ベッドに放り出すように悠生さんを寝かせる。疲れた、明日は絶対全身筋肉痛だ。息を吐いてキッチンに向かおうとしたとき、後ろから袖を掴まれた。

「悠生さん？水持ってきますよ」

「やだ」

「やだじゃないです」

「……帰っちゃう？」

「まだ帰りませんよ」

それでも離してくれない。ごつごつとした大きい手に腕を引かれて、そのままベッドに倒れ込む。悠生さんの腕が背中に回った。

セミシングルベッドでも二人は狭かった。広い胸に顔を押し付ける形になって、居酒屋の匂いと、アルコールの匂い。その奥に悠生さんの香水を感じる。

「……苦しい、です」

「ごめんね」

謝るのに、ぎゅっと腕の力が強まった。控えめに胸を押し返せば、今度は頭を抱えるように引き寄せられる。

凄く、酔ってるんだ。だって悠生さんはいつも余裕があって、穏やかで、頼れる大人な男の人で……。こんなに力が強くて、わがままで、甘える悠生さんなんて、知らない。

すり、と頭に顔を埋めてくるのが何だか可愛いけど、頭のどこかで帰らないと、と警鐘を鳴らしていた。

「悠生さん、一回離して。電気つけっぱなし」

「戻ってくる？」

「……戻ってきます」

明かりを消して、そのまま帰ろうとした。ぎし、と廊下に足を踏み出した途端。

「凜ちゃん、おいで」

薄暗い部屋の中で、名前を呼ばれた。

その低い、耳障りの言い声に引き寄せられるよう、私は悠生さんが待つベッドに逆戻り。「詰めてください」と言いながら、また悠生さんの隣に横になった。

「……凜ちゃん、起きてる？」

「起きてます」

ぼそぼそと話す声につられて、私も小声で返す。背中に腕を回されても振りほどけないまま、抵抗するのを諦めた。明日小言を言う方が早い。

その諦めが良くなかったのかもしれない。

「凜ちゃんってさ」

「……なんですか」

「僕のご飯、本当に美味しそうに食べてくれるよね」

「……それは、美味しいから」

「嬉しい。あとね、眠いとき目を擦る前に一回だけぐっと堪えるでしょ？」

「見てるんですかそんなとこ」

恥ずかしくて、思わずふふ、と笑えば身体が離れて顔を覗き込まれた。薄暗い中でも分かる、優しい甘い顔。

「見てるよ」

回されていた腕が、私の髪を梳く。ゆっくりと、指が耳の縁を掠めた。最初は当たっただけだと思っていたのに、少しずつ、指先に意図を持ち始める。

「警戒心強そうに見えるのにすぐ心開いちゃって、ちょっと心配」

「ゆ、悠生さん」

「男として見て無さそうなのに、どこか意識してそうなところも」

吐息が耳に当たって、背中がぞくりと震える。腕から抜け出そうとすれば、逆にぎゅっと引き寄せられた。脚を動かしても上から抑えられて、気づけば完全に囲い込まれる。

「かわいくて仕方ないんだけど」

身体の力が抜けていく。居心地のいい関係が、じわじわと甘い何かに変わっていく気がした。

「耳元で、喋らないでください……っあ！♡」

そのままふっと息を吹き込まれて、変な声が出る。思わず顔を背ければ、悠生さんが息を漏らすように笑っていた。たまに見るちょっと意地悪な笑顔。けど、普段よりも瞳の奥に見える、明確な熱。

「もう、からかわないで！」

「ごめんね、凜ちゃんが可愛くて」

「だからそれ……！」

するりと頬が撫でられた。大きな手のひらで包まれて、そのまま綺麗な顔が傾き、唇が軽く触れた。ビールの匂いと、少しの苦み。

「んっ」

「……口、開けて」

「む、もう、ここまでにして……んんっ！」

緩く舌を絡められて、そのまま口の中をゆっくりと撫でられる。上顎をなぞられると腰が浮いた。鼻から抜ける自分の吐息が高くなっていくのが分かって、恥ずかしいのに動けない。

頭を撫でながら深めてくる悠生さんのキスが、怖くなかった。それが、まずい。

「あっ、んん……は」

「きもちい？」

「んあ♡」

ちゅ、ちゅっと唇を吸われて顔が離れる。口を開いたまま頷く私は、バカみたいな顔だと思う。電気を消しておいてよかった。閉め忘れたカーテンから入ってくる月明りが、私まで届いていないことだけを祈る。

服の裾から冷氣が入って来て身体を震わせる。悠生さんの熱い手がひとりと上半身を優しく這うのに合わせて鼓動も早まった。

私はお酒なんて飲んでないのに、さっきのキスで酔ったのかと錯覚するほど顔が熱い。腰のあたりを意味ありげに行き来した手は、そのまま服をまくり上げて胸の突起に触れた。

「ここ、自分で弄ったことある？」

「な、ないです……ん」

「じゃあゆっくり、優しくね」

芯の周りをなぞる指は、下着越しにくるくる動く。自分でも触らない場所なのに、どこか期待を持つような錯覚に陥った。切りそろえられた爪がぎりぎりをなぞっていくのに目が離せないでいたら、悠生さんは起き上がって覆いかぶさってくる。もう片方の手がまた耳をさわさわと弄り始めた。

「んんっ♡あ、耳……っ」

「耳はきもちいんだ。覚えておくね」

「ああ！？や、それ、……」

耳たぶをあぐあぐと甘噛みされる。ピアスも開けたことが無いまっさらな耳。初めての刺激が快感なのか理解できない間に、どんどん事は進んでしまう。気付けばブラもずり上げられていた。

ベロリと舐めあげられたかと思えば、尖らせた舌が耳の淵をゆっくり行き来する。逆の耳は穴に指を突っ込まれてざりざりとほじられた。親指で耳の裏を撫でられて、もう何をされているのか分からない。

すりっすり♡ちゅ、じゅる♡

「うあ！は、あんっ！あ、あ……♡あ、んあ……」

「きもちいね。かわいい、ほらここも」

「んぐっ！！？ああっ！」

ぴんっ！こりこり♡

優しく撫でられていた乳首を、急に弾かれた。聴覚に直接刻み込まれた快感は全身に回っていて、乳首への刺激が快感と認識するのに時間はかからない。捏ねられるように弄ばれると、もっとと強請るように胸を突き出してしまう。

「ひ、ああ、や、ば……んう♡」

「おっぱいも気持ちよくなってきた？えらいね」

「あ、うそ、ひあ……んう……ああああああっ！？♡」